
ここにいるよ。

翔一郎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ここにいますよ。

【Nコード】

N5450D

【作者名】

翔一郎

【あらすじ】

ごく普通の高校生が、ありがちな毎日の中で、笑顔や涙の意味を感じて、そうして当たり前のように恋をする……そんな物語。

1話 『君に出逢えたこと』 その1

私、大塚由紀は高校生活二日目を迎えております。

とはいえ、記念すべき入学初日をまさかの風邪で欠席してしまったことは、まぎれもない事実。

そのせいか、クラス内でも出遅れてしまった感があって、隣の席の子にさえ話しかけられない現実。

ああ、何やってんだろ、私。

この青春ど真ん中の高校生活をヒツキーで過ごさなければなら
ないかも……というマイナス思考が働いていたせいか、私は頬を机
にベタツとつけて放心状態を続けていた。と、その時、

「おい大塚、友達が呼んでんぞ」

え、私？ 勢いよく声のする方を向くと、中学からの親友の瀬川夏
希が手を振ってくれているではないか。

私もそれに応^{こた}えるように力いっぱい手を振ってみせた。

ところで、「おい大塚、友達が呼んでんぞ」の声の主は……だれ？

夏希の隣には男子が一人。

あつ、この人同じクラスの男子だ。名前は、えーつとたしか“ま”

……“ま”……なんだっけ？

「由紀、何ボーっとしてんの？ 早くこっち来てよ」

おつと危ない危ない。今はわざわざ私のクラスまで来てくれた親友
を優先するべきじゃないか。

「ごめんごめん。ちよつとマイナス思考の神様が降りてきてて、心
から残念な気持ちになってたんだ」

「ぶっ、なにそれ」

ふう、笑ってくれた。気まずい空気を吹き飛ばせたっぽいから、こ
れでいいんだろう。

うん、これがベストだろう。

「……それじゃ、俺もう行くわ」

「あ、うん。ありがとう」

どうやら夏希はこの男子を知っているらしい。

一目見て「イケメン」ということはわかるけど、それ以上でも以下でもない。

「夏希、あの人が知ってるの？ えーつと“ま”……“ま”……」
「真山君？」

あつ、それだ。真山翔だ。思い出した。

「今初めて会ったよ。どうやって由紀を呼ぼうか悩んでたら真山君が声をかけてくれて」

なるほど、すべては私のせいだ。私があんなに鬱^{うつ}だったせいだ。

夏希ばかりじゃなく、真山にまで気を使わせてしまった。こりや最悪だ。

「……どうしたの、由紀？」

「えつ、うん、大丈夫」

あれ？ 答えになってない？ まずい、まずいよこの場面。

「そつ、そつ、それよりさ、何か話があるんじゃないの？」

「あつ、そうだった。明日、入学課題テストあるじゃん？ 今日帰って一緒に勉強しようと思って」

……なにそれ？ テスト？ それも明日？

きつと今の私はものすごく気の抜けた顔をしてるんだろな。

「もしかして、知らなかった？」

「……あはは」

作り笑いをしてみても、それは気まずい空気をより重くするだけで、ただただ虚しかった。

夏希が笑いながら「どんまいどんまい」と元気付けてくれている感覚はあったけど、その笑顔も声も、私の心にはまるで響いてなかった。

――放課後、教室にて――

さて、時計は6時を回っている。空も茜色に染まって良い感じだ。

私は、またもや頬を机にベタツとつけて放心状態。

そういやそんなテストがあつて、その範囲となる課題ももらつていたことを今更思^{いまわ}い出していた。

……どうりで春休みに夏希を遊びに誘つても、断られる一方だったわけだ。

グラウンドで部活をする声や、ブラスバンドの奏でる音だけが聞こえてくる。そんな中、

「まだいたんだ？」

声の主は真山だった。夕焼けに照らされた彼は、また一段とかつこ良く見えてしまう。

とはいえ、別に異性として意識することはないし、この胸のドキドキは不意に声をかけられて驚いたものだった。

「明日テストあるなんて知つてた？」

「……そりゃもちろん。てか、常識レベルの質問してくるんだな」
うっ、その返答が私の胸を見事に突いていることを、真山は気にもしないだろう。

それからは私は、課題すらやっていないこと、テストなんて知らなかったこと、すべてを話してみた。

少しだけでも、このどうしようもない想いを誰かに聞いてもらいたかつたから。すると、

「ぶっ、あはは。それ本気で言つてんの？　ありえねえだろ」

ミスった。コイツに話した私がバカだった。

優しい顔をして、実は人を小バカにする奴だったなんて。ヤな奴だ。

「……でもさ、別にいいんじゃない？」

……え？　なに？

急に優しく微笑みかけてこられると、今私の中で作られた「真山」

「やな奴」という方程式が成り立たなくなるじゃん。

「範囲は中学の復習なんだし、それにこのテスト、成績には入らないっばいよ。だから思い切って0点取ってみても、卒業する頃に思っ出になるじゃん」

冗談で言ってるのか本気で言ってるのかよくわからないけど、今度は微笑みを超えて思いきりの笑顔だ。

……前言撤回。真山は、意外と良い奴だ。

「0点って、それはないよ」

気分が楽になった。いつの間にか、自然と笑えてたんだ。

それから先生が見回りに来て、「早く帰りなさい」と注意されるまで、私達は話し続けていた。

ほんと、どうでもいいようなバカみたいな話だったけど、私にとつて、高校最初の思い出になったんだ。

1話 『君に出逢えたこと』 その2

それから一週間が経った。

そして今まさに、例のテストが返却されているのだ。

国語50点英語50点のテストで、合計100点満点らしく、その学年平均は65点。

もちろん平均なんて取ってる自信はないし、さすがに開き直ってる部分だつてあるくらい。

そうだな、30点は堅いかな。

「大塚」

きた、私だ。40点以上あれば合格だろう。自分で自分を褒めてやろう。

……受け取ったテストに大きく書かれた「0」

ほんとに0点を取ってしまった。

「冗談は休み時間だけにしてくれ」と、先生からの一言。むしろ冗談であつてほしかった。

記号問題もいくつかあったのに、奇跡的に全てはずしてる現実。

「あつ、マジで0点取ってんじゃない」

真山だ。急に現れたかと思えば、私を見ることもなく点数をチエックする。なんてやな奴だ。

「バカ、声が大きい！」

「わりいわりい。でもやっぱ違うよな、大塚つて」

「うるさいなあ。そういう真山はどうだったのよ？」

「82点」

うわっ、ピースサインしてるし。無駄に笑顔が素敵だし。

「うそ！？絶対平均以下だと思ったのに」

これは本音。真山みたいな奴つて、学力は中の下くらいだと思つた。

「それ、俺にすんごい失礼。過小評価しすぎだし」

真山がムツとした。そういえば初めて見るな、笑ってない真山って、なんか新鮮だ。

自分の席に着いて、これ以上ないほど落ち込んでいたら、いつの間にか休み時間になっていた。と、その時、

「大塚さーん」

え、なに？

不意に私の名前を呼ぶ女子がいるではないか。

「由紀って呼んでもいいよね。私、白石香、よろしくね」

「私は堀北利恵。利恵って呼んでね」

突然の自己紹介。

私は転校してきた時のような「大塚由紀です、よろしく願いします」という堅苦しいあいさつをしてしまった。

「なんか堅いし。もしかして天然？」

笑ってくれた。久しぶりだ、こんな場面。

やった。やつと青春っぽくなってきた。

……でも、どうして急に声をかけてくれたんだろ？

「ところでさ、由紀って真山君と仲良いの？」

「けっこう二人で話してるよね？」

なるほど、そういうことですか。二人とも恋をしてるわけですか。

やっぱ真山ってモテるんだな。

「一応……友達だと思う」

曖昧な返事をしてしまった。でも、胸を張って「友達だよ」と言う勇氣もなかった。

真山を知ったのはほんの1週間前のこと。まだ携帯のアドも知らないければ、どこ中出身かも知らない。

「いいよなあ、真山君と普通に話せて。ねえ、紹介してくれない？」
おっと、いきなりきましたか。香は美人だし、利恵は可愛いし、二人とも自信があるんだろな。

せっかくできた友達だ。丁重にいかないと。

「うん、わかった。ちょっと待ってて」

えーっと、真山はどこだ？ …… いた。あの男子軍団の真ん中。相変わらず笑ってる。

真山以外の男子とは口を利いたことなかったから、ジーっと真山を見続けて、私に気づいてくれるのを待った。すると、十秒足らずで目線が合ってしまった。

「ちよつと来て」と口パクをしたり、ついでに手で「こつちこつち」とやってみせた。

「どしたの？」

「うん、こつちが白石香ちゃんで、こつちが堀北利恵ちゃん」

「……で？」

真山の反応は正しかった。いきなり自己紹介オンリーをした私が間違いだった。

沈黙。

香も利恵も緊張して何も言えないらしい。

私は私で、この気まずい空気を吹き飛ばす術すべを持っていなかった。すると、

「えーっと、白石と堀北だっけ？ よろしくな」

おつ、その笑顔ナイスフォロー。さすが真山だと、素直に思った。

真山の一言で緊張がほぐれたのか、香と利恵の顔にも笑みがこぼれ始めた。

「うん、よろしく。あつ、よかったらアド教えてよ」

いきなり！？

「別にいいけど」

いいの！？ 男女のアド交換って、こんなに簡単にしていいんだ？

初めて知った。

私が奥手だったのだ。

アドを教え合ってる三人を見てみると、自分がバカに思えてくる。三人は笑ってるのに、あんなに楽しそうなのに、私は楽しくない。この笑顔だって無理して作ってる。

真山のその笑顔は、本物なのかな？

キーンコーンカーンコーン……チャイムだ。授業が始まる。

みんなが席に着いていく中、香と利恵が私を見て、

「由紀、ほんとにありがとう」「おかげで真山君と話せたよ。ありがとうね」の一言。

「ありがとう」と言われると、嬉しい。

何だかんだ言って、友達だという意識が生まれただけで、私は満足だったのかも。

ただ一つ名残惜しかったのは、真山がこのタイミングで私のアドも聞いてくれなかったこと。

それだけが、ちよっぴり寂しかった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5450d/>

ここにいるよ。

2010年10月11日01時54分発行